

病院建築におけるブロックプラン計画の系譜 —日本の病院建築の計画史に関する研究—

中山茂樹 243

栗原嘉一郎 [(株)栗原研究室 代表取締役社長・工博]

個々の建築事例は内外両面における固有の特殊条件を含んだ多くの要素の総合として多様な形で存在するのだから、これを分類しようとするときには明快な視点・切り口が必要である。計画史の研究というのであれば分類自体に計画論としての意味・意義が感じられることが大切であろう。

この報告における分類作業にはそれなりの筋道もないではないが、評者には明快性において不満が残る。形態上の分類から入りながら後半では機能構成上の分類が混ざり込んできて作業の意図が見えにくい。図の表現や配列も分かりにくく、本文の記述との整合性も良くない(型の提示順においても名称においても。本文には外来独立型の名称を掲げながら図にはその名称は示されない等)。特定の病院名を挙げて重要な論考を加えながら図の提示がない例があったりもする。医療福祉建築協会内の報告書としてはともかく、学会という広い場に報告するには不親切であろう。

長澤 泰 [東京大学工学系研究科建築学専攻 教授・工博]

19世紀中葉の英国で、フローレンス・ナイチンゲールが提唱・誕生したナイチンゲール病院は、近代病院の基盤として有名である。そこで採用されたパビリオン型に始まり、本報告は現代に至るわが国病院建築のブロックプラン計画を、30件以上の事例を用いて丹念に解説している。報告の中に見られるパビリオン型、一体型、基壇堂塔型(一般的には堂塔基壇型と呼んでいると思うが…)、多翼型という名称は、以前から病院形態を示す用語であるが、病棟独立型と新病棟独立型という名称は新しい。

医療が感染症から生活習慣病へとターゲットを移した現在、少子・高齢社会の中で病院はその存在意義を問われている。20世紀の医療の場として中心的な存在であった『病院』は21世紀の今日、「病の館」ではなく、「健康の館」すなわち『健院』になるべきだと筆者はかねてから主張しているこの報告は過去の『病院』を総括するために貴重な解説を提供している。

東京都における公立小中学校と地域公共施設との複合化事例における建築概要に関する実態調査

斉藤 潔, 上野 淳 249

三橋伸夫 [宇都宮大学工学部建設学科 教授・工博]

本調査は、東京都における複合化公立小中学校の全事例が把握され、かつ、建築形態から6つに分類化する等、的確に整理・分析がされており、資料的価値が高いと判断される。さらに、都心部に特徴的に見られる大規模複合化12事例については、動線計画の実態分析も行われており、学校と複合化施設との管理区分の実態を整理している。

都心部の大規模複合化事例に限らず、現在、公立小中学校は生涯学習・体育、保健福祉、さらには防災避難、交流(教育の地域開放)などの観点から地域施設としての開放性が求められている反面、児童生徒の安全な生活空間としての閉鎖性もまた同時に求められていると言える。こうした相反する諸要求が建築計画的にどのように処理されるべきかは大きな課題であると考えられるが、本編では踏み込んだ議論には至っていない。次編における分析・整理に大いに期待したい。

藍澤 宏 [東京工業大学文教施設研究開発センター 教授・工博]

少子高齢化の時代になり、小中学校施設に複合化用途を附加した整備が、特に都心部で実施されるようになってきている。これらは単に、生涯学習化社会の要請や高齢者福祉対策のために行われているのではなく、地域社会形成のこれからの方向性を提示させるものとして注目される。本報告は、それらに対応すべき複合化施設の実態を、東京都下の小中学校の悉皆調査で明らかにしようとしたものである。その結果、10年間で約2.7倍に複合化事例が増加していること、用途が時代要請に対応し、且つ、その形態的特徴に6つのタイプが存在していること、そして未だ複合化の方法は、併設的な部分使用型で既存の学校運営に支障がでない形態が半数以上を占めていること等の、建築的特徴を明らかにしている。実態報告であるから、複合化施設の課題や、運営には言及していないものの、多くの地方自治体の複合化施設計画にはおおいに参考になると評価される。

北大キャンパスにおけるサクシュ琴似川の潰廃と再生

八巻幸恵, 越澤 明 255

窪田陽一 [埼玉大学大学院理工学研究科環境制御工学専攻 都市基盤工学研究室 教授・工博]

この報告は、北海道大学のキャンパス内に河道をもつサクシュ琴似川を対象として、一時は廃滅状態に至った河川環境が大学当局と札幌市の協力により再生に至るまでの経緯を、歴史研究の方法により明らかにしたものである。このような研究調査は環境形成史の範疇に属するものと言え、過去からの経緯を顧みずに環境を改変してきた技術のあり方を根本的に修正する時代となった現代において、眼前の環境が何故そこにそのような姿であるのかを正しく知る上で重要な方法論になると思われる。この報告では、おそらく資料的な制約から北海道大学のキャンパス整備後から再生事業までの経緯に焦点を絞っているが、環境再生においては原環境の姿をいかに明らかにするかが鍵となり、昭和初期のキャンパス整備以前の状態がわかれば再生事業の評価もより深い観点から行えるであろう。今後の調査の進展に期待したい。

星 卓志 [札幌市企画調整局都心まちづくり推進室 事業調整課長 工博]

本報告は、北海道大学と札幌市の協働関係が奏功し、同大学構内におけるサクシュ琴似川の再生に至った経緯を報告している。両者の事業タイミングと計画意思の同一性・相違性を詳述しながら、達成出来た事と出来なかった事を明らかにしている。

生活の質の向上や生態系の回復のため、都市における水辺環境の再生の重要性が認識され、枯渇河川の水流の復活、暗渠河川の親水型への改修等が各地で展開されながらも、それぞれに困難性を抱えており、本報告は類似事業の実務者へ貴重な情報を提供するものとして評価できる。

本事例は、大学構内という特殊な状況の中で成立し得たものであるが、既成市街地での再生への取組みが一般的であることから、今後、より普遍性のある計画技術の確立に向けた研究展開が求められる。